

IV 花き

現況

1 キク

坂井では、秋植え6月咲きキクの「さき風」で58cm、5月下旬より開花が始まっている。秋植え夏秋ギクの「小鈴」は草丈42cmで葉数は23.3枚である。病害虫として、クロゲハナアザミウマ、アブラムシ類が中発生、白さび病が中発生しており、カスミカメムシ類の被害が一部圃場に出ている。

春植え夏秋ギクは4月15～20日頃から定植され、5月4日頃までに終了している。6月19日の調査で「小鈴」35.7cm(昨年15.5cm)、葉数17枚(昨年13.4枚)、「めぐみ」44.7cm、葉数21.7枚、5月2日に定植され、エスレルを2回散布している。病害虫は、アザミウマ類とアブラムシ類が少発生している。

奥越地区では、秋植え夏秋ギクの6月4日の調査(昨年6月12日)で、「秀まこと」78.3cm、葉数39.7枚、花蕾径6.4mm、「白霧」79cm、葉数49.7枚、花蕾径4.0mm、「あかね」76.3cm、葉数51.3枚、花蕾径5.3mmであった。病害虫として、黒斑病、黒さび病(写真1)、アブラムシ類が微発生、白さび病が中発生であった。開花が例年より早く、施設物は5月



写真1 黒さび病

中旬から、露地は6月4日より出荷が始まっている。

春植え夏秋ギクの6月18日の調査(昨年6月12日)では、「精あかり」45.8cm、葉数28.7枚、「小鈴」38.8cm、葉数25.8枚であった。病害虫として、アザミウマ類、アブラムシ類が少発生している。越の花生産組合の作見が6月16日、キク部会の目揃え会は6月20日に行われた。

福井市の春植え夏秋ギクの6月15日の草丈調査(昨年6月15日)で、福井市二日市町の「小鈴」23.8cm(昨年34.5cm)、「花絵」33.0cm(昨年42.5cm)「小雨」23.8cmで、「小雨」はエスレルを2回散布した。福井市東郷地区では、「小鈴」38.0cm(昨年24cm)、「恋心」32.8cm(昨年33cm)、「翁丸」29.8cm(昨年28cm)で、「翁丸」では一部発蕾が見られる。エスレルは5月15日以降に1回散布した。福井市大土呂町では、「小紫」33.5cm(昨年56.5cm)、「小鈴」では42.5cm(昨年49.5cm)で、「小紫」は一部で発蕾が見られる。ピンチ後にエスレルを1回散布している。全体に定植が遅れたが、花芽分化は早まる傾向が認められた。

病害虫では、福井市二日市町でアブラムシ類が少～中発生している。福井市大土呂町ではアブラムシ類が少発生し、チョウ目害虫による食害が少程度発生している。

5月15日には福井花卉出荷組合で目揃えと研修会が行われた(昨年5月27日)。

丹生地区の春植え夏秋ギクでは、6月14日の草丈調査(昨年6月16日)で、「小鈴」49.3cm(昨年49cm)、「恋心」42.7cm(昨年64.5cm)、「翁丸」40.3cm、「花絵」35.7cm(昨年61cm)で、エスレル処理はなかった。病害虫では、アブラムシ類が少～中発生している。

越前市は6月14日の草丈調査(昨年6月16日)で、「はじめ」27.2cm(昨年14cm)、「秀光」37.3cm(昨年32cm)、「恋心」49.0cm(昨年43cm)、「花絵」31.7cm、「あすか」24.5cm、

「牛若」34.5cm、「松風」13.8cm（昨年 24cm）、シューペガサス 18.7cm であり、エスレルは「花絵」以外で1～2回散布している。病虫害は特に発生していなかった。

二州地区の秋植え夏秋ギクの草丈は6月19日の草丈調査（昨年6月19日調査）では、「小鈴」85.2cm（昨年69.2cm）、「花絵」98.5cm（昨年75.4cm）、「さざなみ」82.8cm（昨年74.0cm）で、前年より草丈が長い。病虫害はアブラムシ、アザミウマ類が少発生している。

春植え夏秋ギクは、「小鈴」62.8cm（昨年50cm）、「花絵」51cm（昨年58.6cm）、「翁丸」48.6cm（昨年50.4cm）。アブラムシ類が少発生、カメムシ類の食害が見られた。白さび病が少発している圃場も認められた。

春植え9月咲きギクの「わかさ」は11.1cm（昨年11.2cm）、「映紅」16.6cm（昨年12.2cm）、「おりがみ」15.8cm（昨年13.0cm）である。アブラムシ類が少発生している。

若狭地区の秋植え夏ギクは6月18日の草丈調査（昨年6月16日）では、「はじめ」104.6cmで立弁（昨年99cm、立弁）、「とび丸」101.8cmで立弁（昨年80.4cm、蕾径7.0mm）と昨年よりやや早めである。

春植え夏秋ギクの「しらかば」53cm（昨年50.8cm）、「翁丸」53.8cm（昨年50.2cm）、「くれない」53.2cm（昨年44.0cm）と生育は前年よりやや早めである。

9月咲きギクは5月20日から定植され、「みゆき」、「大信」、「おりがみ」等の品種で5.8～7.8cm。昨年在7.2～11cmであったのに対し、遅めの生育となっている。病虫害は、小浜市でアザミウマ類が少発生、カメムシ類による食害が微発生している。

農業試験場の春植え夏ギクおよび夏秋ギクの定植は3月28日に挿し芽、4月11日に定植し、4月25日に摘芯した。6月14日調査の脇芽長は表1のとおりである。

表1. 農業試験場 露地圃場における生育状況(6月14日現在)

品種名	草丈(cm)	品種名	草丈(cm)
はくよう	58.2	東海福祉	52.9
さやか	57.6	あすか	62.1
さぼてん	56.2	はなふさ	48.4f
花絵	64.6	牛若	57.5
星の砂	70.5	こずえ	72.0
シャロット	78.2	ふくろう	68.2
白樺	53.2	七夕かざり	66.8
舞人	57.1	ひまわり	61.3
翁丸	49.3	シューペガサス	50.6
さきがけ	48.5	奥越の舞	49.1
はるか	50.6	清風	55.3
織姫	59.0	サマーゴールド	48.0
とび丸	67.8f	夏紅車	57.0
小鈴	57.3	砂浜	53.0
うたげ	60.1	星の輝	56.0
玉姫	30.6f	スーパーイエロー	57.0
くれない	51.6	新流星	33.5f
かばちゃん	50.9	宝の山	62.5
小紫	51.9f	サマー3号	54.0f
やよい	66.7		

挿し芽:3月26日、定植:4月11日、摘芯:4月25日

f:出蕾

2 ユリ

奥越地区のシンテッポウユリでは、「F₁オーガスタ」の4月下旬定植実生苗が、6月20日の調査（昨年6月14日）で、草丈25.6cm、葉数36枚で抽苔している。中心球の一部に葉枯病が発生している。

あわら市では中心球利用の露地栽培の「オーガスタ」では、草丈60～70cm、葉枯病が少発生している。5月下旬に定植した露地栽培の「雷山2号」では、本葉4～6枚程度で、9月上旬出荷予定である。実生苗利用の施設栽培では、4月下旬定植の「オーガスタ」は草丈18.6cm、葉数22枚で、8月上旬に開花見込みである。LAユリは、5月下旬に出荷が終了した。

坂井市春江町の季咲きオリエンタル系ユリ「クリスタルブランカ」が3月下旬に定植され、6月19日の調査では草丈83.6cm、葉数76枚、花蕾数5.6輪となっており、7月上旬に開花予定である。ワタアブラムシが微発生、やや日焼け気味である。

3 スイセン

促成栽培は、平坦地で栽培を行っている生産者が出荷時期の拡大を目的に導入している。促成栽培の高温処理が6月18日（昨年6月12日）から始まった（処理24,500球）。2回目6月25日を予定している。

4 トルコギキョウ

あわら丘陵地の2度切り栽培のレイナ系、ロベラ系、ロジーナ系他の品種では、6月18日の調査（昨年6月12日）で草丈70～80cm（昨年「ロベラピンク」で草丈70cm（6月12日調査））。6月末から出荷を予定している。一時期アザミウマ類の被害がひどかったが、ディアナSC等の連続散布により収まっている。炭そ病が一部で少発生している。4月28日定植のクラウン系品種ものは、6月18日調査で、草丈15～25cm。ボリュームがあるしっかりした株になっている。10～15%程度の株で高温ロゼットが発生した。5月25日前後に定植のラブミー系品種では、6月18日調査で草丈5～10cmで、10%前後で高温ロゼットが発生している。立ち枯れ病が一部で少発生している。

大野市では、ロジーナシリーズ5～7対葉、草丈12cmとなっている（6月14日調査）。ネキリムシが少発生している。

越前市の6月14日調査では（昨年6月16日）、昨年夏に定植された二度切栽培用の「ボヤージュグリーン」、「レイナホワイト」で77.8～81.0cm、蕾長は1.5～1.7cmであった（昨年「バルカンマリン」56cm、「ボヤージュグリーン」69cm）。盆用の4月下旬定植作型では草丈22.5cm（昨年25～40cm）、一部で葉先枯れ病の症状が発生している。6月咲作型（昨年11月下旬定植）の「ボヤージュグリーン」では草丈91.7cm（昨年69cm）で収穫前半、「ロジーナグリーン」では草丈95.7cm（昨年90cm）、蕾長2.8cmで収穫開始、「プティフル」では草丈69.3cm（昨年78cm）、蕾長1.4cmであった。

二州地区では、美浜で4月下旬に定植された個体の草丈は6月19日調査（昨年6月19日）で28～32cm、一部圃場に葉先枯れ病が発生している。

若狭地区では、「エクローサホワイト」「あすかの舞姫」などが6月上旬に定植されている。

5 その他

あわら市のアスターの「ステラ系」「あずみ系」他の品種で、電照促成作型（3月下旬定植）は、6月15日より出荷開始（昨年6月10日）。旧盆出荷用（4月下旬播種）は草丈10～15cm程度である（6月18日調査）。露地栽培の「くれない」シリーズで草丈12～15cm、葉数12～14枚であった（6月19日調査）。

あわら市のストックの夏播き秋冬どり栽培において、JA芦原ストック部会で6月13日に播種検討会を開催し、前年度実績と播種計画について検討が行われた。

対策

1 梅雨期の圃場排水の徹底

梅雨期の長雨が続くと、根の障害が発生する。そこで、畝の再整備を実施し、冠水しやすい圃場で栽培している場合は、畝溝とこれに交わる集水溝、排水路の溝さらえや清掃、除草を十分に行う（写真2）。

逆に、乾燥気味の気候が続いている場合、畝間灌水を行う。下葉の1/3が朝方から萎れている状態であると、畝間灌水を行う必要がある。夜温が高いときは畝間灌水をなるべく行わない。

実施前に溝さらえ、通路の清掃、土寄せ等を行い、スムーズに水が走るようにする。畝間灌水は、圃場が湿田で排水が悪い場合は、走らす程度、そうでない場合は通常の灌水を基準とするが、夕刻～早朝までとし、明朝の10時には完全に水がおちているようにする。



写真2 陽が昇っても水が抜けない圃場

2 梅雨期の病害虫防除の徹底

1) キク黒さび病

梅雨期の湿潤な季節に多発する。白さび病と異なり、比較的高温でも発生が続くため断続的に発生が続く。

日当たり、風通し、排水をよくする。病葉は見つけ次第摘除する。治療剤としてはマネーシ乳剤しか登録されていないため、予防剤として有機硫黄系剤（兼商ステンレス、ジマンダイセン水和剤、エムダイファー水和剤）の散布を励行する。兼商ステンレスは葉害に注意する。



写真3 黒斑病から下葉が枯れあがった株

2) 白さび病

気温17～25℃の湿潤な環境下で発生しやすい。草丈50～60cmまでは予防剤として、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで1週間に1回散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨

の止み間に、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、マネージ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル：品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布する。散布にあたっては耐性菌の出現抑制のため、同一系統の薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤を用いたローテーション防除を行う。ハチハチ乳剤も白さび病に登録がある。

3) キク黒斑病・褐斑病（写真3）

発生は、降雨との関係が強く、摘心後に降雨が多い場合には早くなる。高温多湿の条件で感染が広がり、降雨等による土壌の跳ね上がりも下葉への感染が助長されるため、例年被害が多い品種は、梅雨前に下葉かきを行う。病葉は、二次感染を防ぐために、見つけ次第摘葉し、圃場外で処分する。

防除薬剤として、生育初期にダコニール1000、ストロビーフロアブルやベンレート水和剤の散布を行う（表2）。

表2.登録のある薬剤例

殺菌剤名	希釈倍率	使用回数	備考
サンヨール乳剤	500倍	8回以内	薬害注意。有機銅剤
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	3回以内	白さび病にも登録があるが、耐性菌に注意する
ダコニール1000	1,000倍	6回以内	耐性菌が出にくい
ベンレート水和剤	2,000～3,000倍	6回以内	

4) アブラムシ類

高温となる夏は一時的に数が減少するが、葉裏など、雨水の当たらない葉裏での繁殖に注意する。同一系統の薬剤の連用は抵抗性個体の発生を促すため、系統の異なる薬剤を計画的に使用する。とくにワタアブラムシ（写真4）は一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすいので注意する。圃場の周辺から侵入するので、周辺雑草の抑制を行い、圃場内の植物体をよく観察し、個体数の少ない初期の防除を心掛ける。種類によっては、生長点付近のみ発生するものの、葉裏を主体とするものがあるため、噴口を多方面から植物体に向けて噴霧し、薬剤の撒きムラを避ける。



写真4 ワタアブラムシ

防除薬剤として、ウララ50DF、アーデント水和剤などを散布する

5) ハダニ類

梅雨明け後の乾燥する夏場に発生が多くなるので、梅雨の期間中に1回と梅雨明け前に1回散布すると効果がある。薬剤の連用によるダニ類の薬剤抵抗性を抑えるため、系統の異なる殺ダニ剤を使用し、生育密度が低い時点で殺卵効果のある薬剤を散布する。圃場の周辺の除草を行い、圃場内への侵入と繁殖を抑制する。特に、下葉の裏に十分薬液がかかるよう、斜め上向きに噴口をむけ、散布する。

6) カスミカメムシ類（写真5）

秋植えの6月咲きギク等の未収穫株が発生源となるので、圃場内に花を残さない。羽のない幼虫が多くを占めると思われる6月中下旬にローテーション防除を行う。特

に蕾や花に成幼虫が集中するので、蕾や花がついたものは注意する。

防除薬剤はスミチオン乳剤かダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤、）がカメムシ類に登録がある。日中になると成虫の飛翔が活発となるため、早朝に防除を行う。5月下旬～6月上旬には、成虫に対しての薬剤を必ず散布する。



写真 5 コアオカスミカメムシ



3 夏秋ギクの品質向上対策

1) 追肥

止め肥の施用時期は開花時期から約50日前ぐらいであるので、施用後、梅雨時期の降雨が多い年では、生育後半に肥料が切れる場合がある。葉色が落ちた場合は、速効性の化成肥料を少量施用する。ただし窒素肥料が効きすぎると白さび病が発生しやすくなるのでやりすぎない。

2) 下葉かき

薬剤散布しても地際部の葉裏には十分に薬液がかからない。さらに病害に侵されている場合は、感染源として残りやすい。風通しをよくして、ムレを防ぐとともに、病害の下葉からの伝染を防ぐため、全体長の5分の1程度の下葉を除去する。除去した

葉は圃場に放置しないで、圃場の外へ搬出する。

ハモグリバエ類幼虫の食害痕が黄変している場合は、必ず葉をとりのぞき、圃場外で処理する。

3) 開花促進方法

ジベレリンの水溶液を散布することで、キクの開花が促進される。花首がのびやすい品種には用いない。登録された使用方法を守る。

剤名	対象作物	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
ジベレリン水溶剤 ジベレリン液剤	キク	25～ 100ppm	生育期	茎葉散布 50～100ℓ /10a、使用回数2回以内。

4 スイセンの管理

1) 促成栽培の球根管理

斑点病（写真 6）の発生がひどかった圃場の球根はなるべく用いないようにする。高温処理、くん煙処理後はできるだけ涼しい納屋などで保管する。乾腐病等の病害が発生している球根は適時取り除く。

2) 促成栽培の定植後の管理

発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行うとともに遮熱ネット等での減光、敷きわら設置で地温を極力低下させる。

3) スイセン葉先枯病がひどかった圃場では、太陽熱消毒を実施する。甚大な被害があった部分に透明マルチを被覆し、土などを掛けて密閉し、梅雨明け後から1か月程行う。



写真 6 スイセン斑点病

5 ストックの播種と育苗

1) 播種

平坦地では7月下旬播種を目安に準備を進める。発芽適温は20～25℃の涼温を好むため、酷暑期は発芽が悪くなる場合がある。特にアイアンシリーズは発芽が悪くなる。

2) 播種用土

清潔で粒子の細かく揃ったものを準備し、覆土は発芽を揃えるため均一な厚さにする。用土中の肥料分を少なくすると、葉色が薄くなって、鑑別がしやすくなる。

3) 八重鑑別

八重率を高めるため、必要な苗数の3倍量程度の種子数を播種する。セル成型トレイに播種する場合、2～3回鑑別する。第1回目は、播種7～8日後に発芽が遅れたラップ型の奇形葉を抜く。2回目は淡い葉色で子葉が長く、大きいものを残す。最後の3回目は生育不良株を除去する。

4) 播種後の管理

雨よけ下で行い、高温対策のためにハウスの外側に遮熱ネット等を張る。育苗箱はベンチ等の上に置き風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。

5) ストックの苗立枯病と苗腐病

立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。苗立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病（ピシウム

菌) の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。

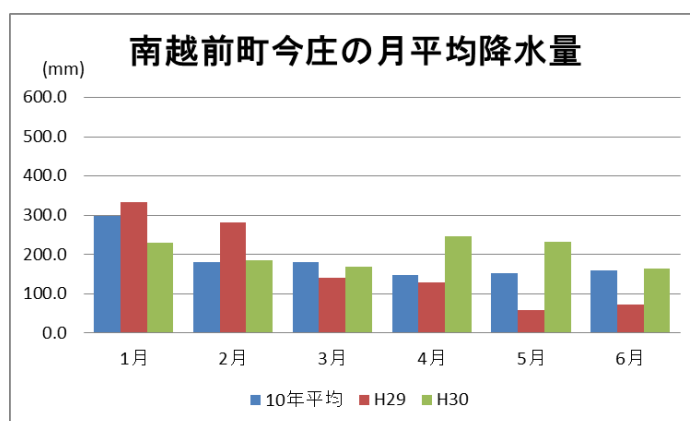
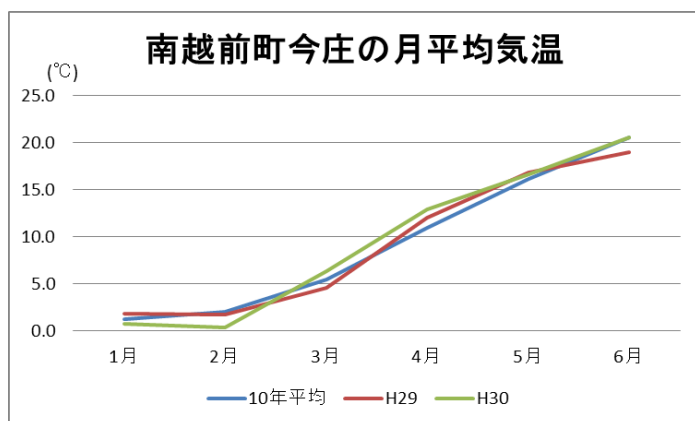
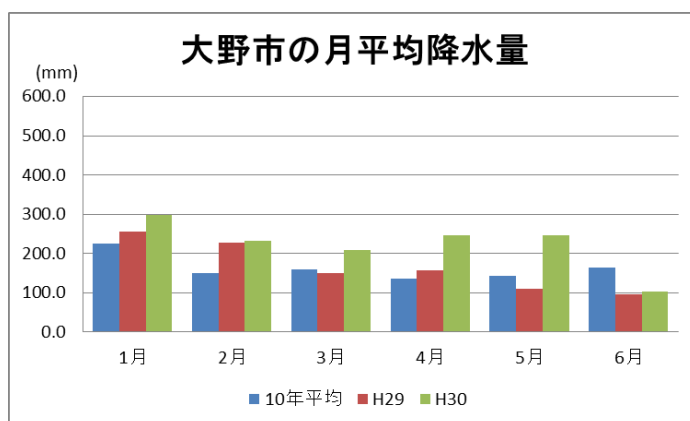
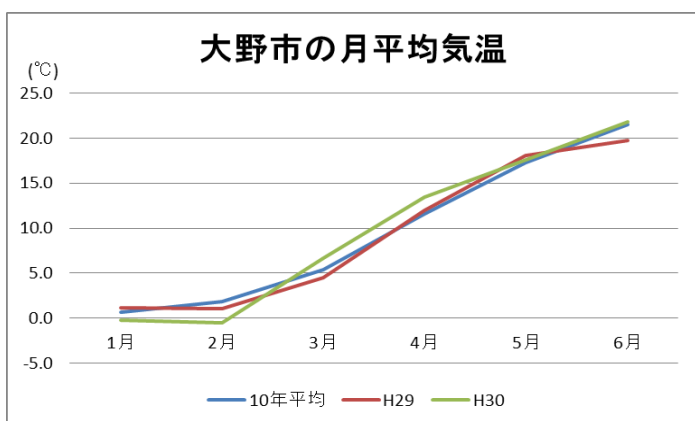
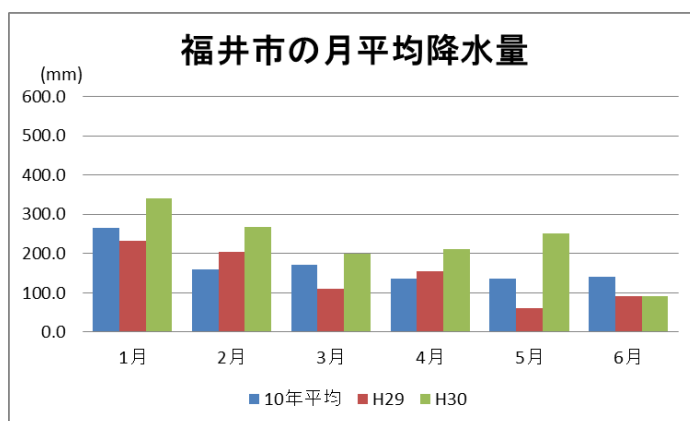
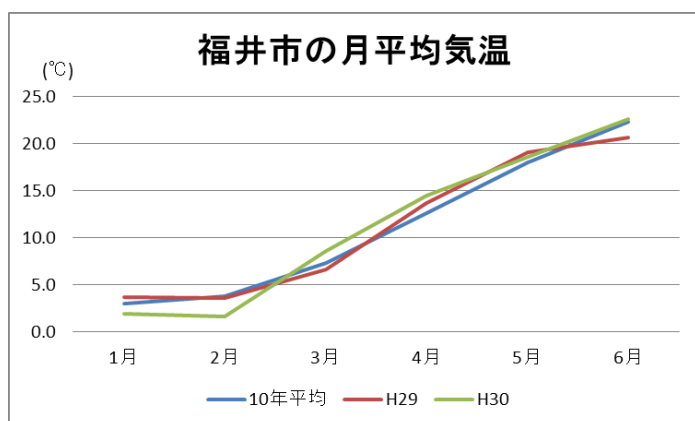
6) 直播栽培

播種時の地表面の温度を極力下げるため、70～80%の遮光資材をハウスの外側にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように絶えず灌水する。徒長防止のため、発芽したら、遮光資材を5～7日以内に取り除く。

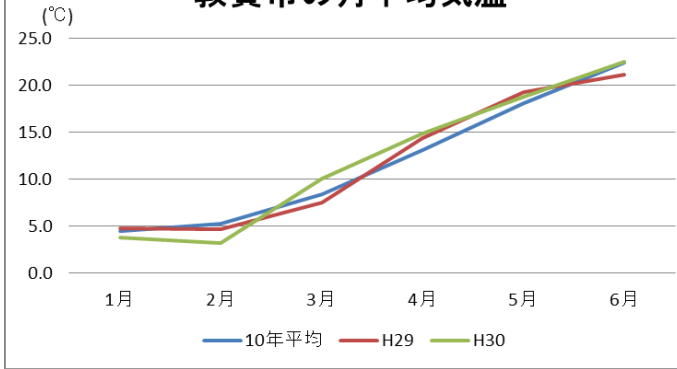
6 ハボタンの播種

- 1) 7月中下旬にセル成型トレイ 200 穴やペーパーポットを用いて播種する。高温期の播種では、遮光 30%程度で行うが、徒長しやすいため、かん水は必ず午前中に行い、遮光ネットをこまめに開閉する。
- 2) 切り花の場合、播種 20 日、本葉 4 枚程度の若苗で定植を行うと草丈が伸びる。直播は、12～15cm ネットの枠に 2 粒落とす。

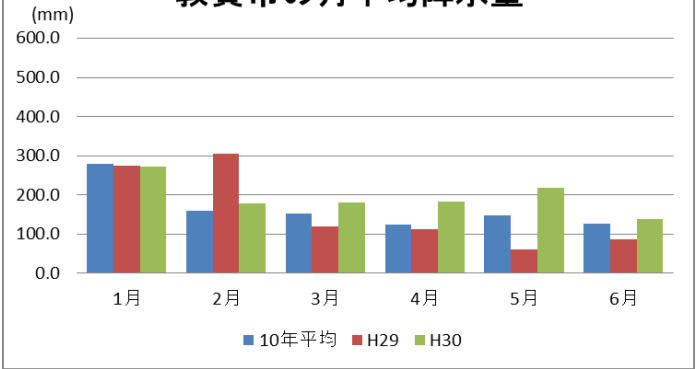
参考：アメダスの気象データ



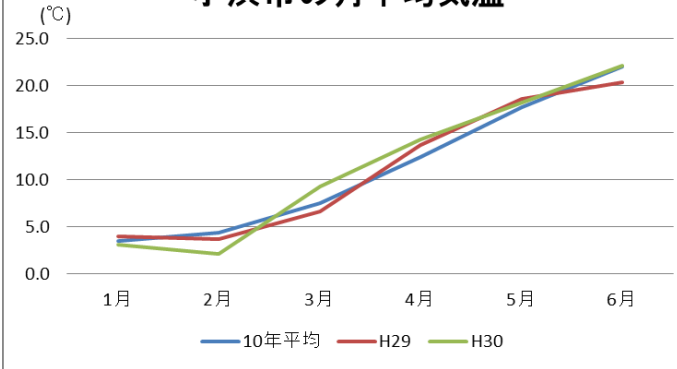
敦賀市の月平均気温



敦賀市の月平均降水量



小浜市の月平均気温



小浜市の月平均降水量

